

滑稽俳句と川柳

飯塚 ひろし

俳句総合誌「俳壇」二月号、俳句時評の「俳句の周辺」で秋尾敏氏が川柳を採り上げ論評されていた。

要約すると、今や俳句と川柳の境界は永遠の謎となり、俳句は「イメージ」、川柳は「意味」という切り分けは難しい。

昨今の俳壇や柳壇を見回すと、「川柳らしい俳句」「俳句らしい川柳」が氾濫していて、これは俳句、これは川柳と区別するのが難しい現状である。秋尾氏は「現代俳句は果たして川柳に勝てるであろうか」と問題提起をされている。

俳句が「や」「かな」「けり」の強い切字を敬遠する風潮から、切れのない散文となり川柳に近づいたとも言える。筆者は地方の川柳会・会長を務めていたが、本格的な川柳は殆ど「笑い」は無く、季語と切字の無い俳句のようなものであった。真面目な川柳は諧が少なく、面白味に欠ける。

俳句も同様に真面目で月並みなものが氾濫して、俳句本来の諧と俳味を持つ作品が少ない。

真面目一方の俳句に異を唱える俳人は、「滑稽俳句協会」の設立、雑誌「俳壇」の
＜微苦笑俳壇＞を創設して活躍中である。滑稽俳句は可笑しさにペーススを加味した
俳句で、愛媛・砥部町在住の八木健氏が会長・主宰をしておられる。笑いでも大笑い
は、俳句の品格がどうしても下がる嫌いがある。

笑いは上品に苦笑程度がベターである。

○滑稽俳句 飯塚ひろし

初鏡笑顔の稽古してをりぬ
暖かし呪文で開ける古金庫
女難の相なくて悔しき業平忌
目隠しの中も目つむり福笑ひ
熱爛に二枚の舌を焼かれけり
世の詐欺師みんな出て来よ星月夜
農継がぬ俵ばかりや地虫出づ
月明やお迎への来ぬかぐや姫

○川柳作品 飯塚雨読 (*雨読は筆者の柳号)

クリスマス神飽食を許されよ
干し大根吊り村中を重くする
寒鰯が縁談話提げてくる
月光で育つたような萌やしつ子

終りまで捲つてみたい初暦
グランドの真ん中よぎる妊婦服
いま休暇朝青龍の髭伸びる
映画村我が青春は原節子

滑稽俳句と川柳を比較すると、表現に大差は無く非常に似通っている。

川柳は季語があっても無くてもよく、季語が不要なだけ措辞が多く思いを述べ易い利点がある。

世に言う「サラリーマン川柳」や、NHKの「ぼやき川柳」なども川柳であるが、正統派の川柳とは大いに異なる。正統派川柳も「狂句まがい」の川柳も、ジャンル別にそれぞれ楽しめばそれでよい。

滑稽俳句では豊かな発想と感性が勝負どころである。

「サラリーマン川柳」や「ぼやき川柳」の笑いと我々の滑稽俳句は一線を画し、出来るだけ格調高くありたい。

川柳の三要素は「ウイット」「ユーモア」「ペース」であり、これは滑稽俳句にも通じる要素である。

現代は川柳を無視して俳句を語れない。それほど滑稽俳句と川柳とのジャンル分けは難しくなっている。

お互いの長所を見習い、より良い作品を目指して研鑽を積みたいものである。